

メッセージ

入澤寿美教授ご退職に寄せて

入澤先生へのメッセージ

安藤 正人（アーカイブズ学専攻元教授）

入澤先生、この度はご退職おめでとうございます。長らくアーカイブズ学専攻のためにご尽力下さり、心よりお礼申し上げます。

2008年4月にアーカイブズ学専攻が新設されたとき、スターティングメンバーとして一緒に仕事を始めたのが、ついこのあいだのことのようです。大学教員としては全くの素人だった私は、大ベテランの入澤先生にいろいろなことを教わりましたが、入澤先生もおそらく、アーカイブズ学という耳慣れない分野でいったい何を教えればよいのか、ずいぶん戸惑われたのではないかと思います。しかし、持ち前の気どらないご性格で、年齢も経歴もさまざまな学生諸氏の心を見事にとらえられ、授業だけでなく教室の外でも、また昼間だけでなく夜も、いわゆる「入澤塾」が盛況だったと聞き及んでおります。

入澤先生には、個人的にもいろいろお世話になりました。とくに、原爆アーカイブズに関する科研では、研究分担者として、デジタルアーカイブズの構築を一手に引き受けていただき、本当にありがとうございました。この科研で、テキサス州のヒューストンにご一緒したことも、楽しい思い出のひとつです。

ところで、入澤先生のご専門は、コンピュータではなくて、たしか「結晶成長」というのでしたね。新しい学生のみなさんはあまりちゃんと見たことがないと思いますが、専攻のホームページにも掲載されている『アーカイブズ学専攻開設記念誌』の表紙のデザインは、実は鉾物の結晶です。記憶や記録のかけらが集まって、やがてアーカイブズに成長する、あるいは、小さな知識や経験の断片が積み重なって、アーカイブズ学という大きな結晶が生み出される。開設記念誌の結晶写真は、まさにアーカイブズやアーカイブズ学を象徴する素晴らしいデザインで、私はとても気に入っています。はっきり覚えていないのですが、このデザインは確か保坂さんが発案し、入澤先生にお願いして写真を提供していただいたのではなかったでしょうか。このことは、ぜひアーカイブズ学専攻の記憶の片隅にとどめて置いてもらいたいと思っています。

ご退職後は、どのようにされるのでしょうか？入澤先生は週に7日間



大学に来ておられる、という噂がもっぱらでしたから、そう簡単に目白を離れられないだろうと推察します。退職後足が遠のいている私が言うのも変ですが、目白にお越しの際は、ぜひ北2号館6階に足を運んで下さるよう、そして、今後ともアーカイブズ学専攻を応援して下さるよう、どうぞよろしくお願いいたします。

(このメッセージは、2019年3月に開催された入澤先生の退職をお祝いする会に、当日出席できなかった私から送らせていただいたメッセージに少し筆を加えたものです。)

入澤先生に感謝

高埜 利彦 (アーカイブズ学専攻元教授)

1981年に私が学習院大学史学科に着任したその年か翌年、誰かに声をかけてもらい目白の野球場での、職員野球チームの早朝練習や試合に加えてもらった時が、入澤さんとの最初の出会いであった。柔道経験者は柔道の体型になるし、野球経験者は野球の体型になる。入澤さんは強肩で足が速く、だから守備範囲が広いし、ミートの旨い格好のリードオフマンなのだけれど、野球の体型ではないスラリとしたスタイルなので、首をひねっていた。後で聞けばバスケットボール経験者であるという。なるほど一緒にやったことのあるバレーボールでは左の前衛で見事なスパイクを決めていた。バスケットボールのジャンプシュートとバレーボールのスパイクは間の取りかたが共通する。ちなみに、私はその両方ができない。

その後は野球場以外で、入澤さんの存在を知っていた。学習院という組織には、自ら変えていくというよりは、現状を保っていけば充分と考える向きが多い。そのなかで理学部菅教授のもとで、大学の情報学教育や学習院全院の情報システム導入に、入澤さんの果たした貢献は大きい。一般教育の授業科目に、それまでなかった情報学入門などの授業科目を設置し、授業担当して軌道に乗せたその実行力は、見事なものであった。その尽力によって、他大学に比べて大きな後れを取らないですんだ。

2008年のアーカイブズ学専攻開設に向けて、入澤さんに創設メンバーに加わって頂けた時にも、新しいことにチャレンジす

る前に向かう力が働いたのではなかろうか。専攻開設から11年間、創設メンバーの安藤正人・保坂裕興・武内房司・私とともに、入澤さんは専攻の屋台骨を支えてくれた。担当する授業は勿論のこと、多彩な年間行事のあれこれにも常に参加され、院生と一緒に国内外の研修旅行も、一つ一つが楽しく思い出される。どん



な時にも、おおらかな入澤さんの存在が、アーカイブズ学専攻のチームワークを良くし、院生たちの学びやすい環境をつくってきたと、私は思っている。入澤さんに感謝するとともに、創設以来続くアーカイブズ学専攻のチームワークが、これから一層発展することも願っている。

入澤先生のご退職に寄せて

高山 正也（学習院大学元客員教授）

入澤先生が先に定年をお迎えになりご退職されたとのこと。定年退職を無事迎えられたことを他の方々と共に心からお祝い申し上げたい。近年のアーカイブズ学にとって、情報技術は枢要な地位を占め、学習者にとっては不可欠の領域であった。この領域を今日までお支えいただいた先生には、本当にご苦勞様と、労い申し上げるとともに、今後ともに折に触れて、貴重なお助言をお願い申し上げたい。

本当に長い間お世話になり、有難うございました。末永くお元気で過ごしてください。

入澤道場での厳しい修行の日々

橋本 陽（入澤道場門下代表）

デジタル記録に対する作法を学ぶ入澤道場。道場が始まったきっかけは、前専攻主任の安藤正人先生の科学研究費プロジェクトです。プロジェクトの一環として、入澤先生主導の下、デジタル検索システム構築のためのチームが作られ、私もその一員に加えていただきました。時々思い出すのは、科研初年度の2013年に広島で開かれた成果報告会です。その夜の飲み会で、先生と私の間でチームの進め方について口論が始まり、「もう辞めた！」と互いに言い合うほどのケンカとなりました（先生にはすぐに許していただきました）。そういったイザコザもありながら、翌年には科研のパートナーであったヒューストンのアーキビストの提案もあり、OmekaとAtoMという二つの検索システムのソフトウェアをテストすることになったため、勉強会の開催を入澤先生にお願いしました。こうして、入澤道場は発足しました。ちなみに、入澤道場の名付け親は、同じチームの一員でもあった元（ウォン）ナミさんです。元さんが入澤道場と言い出したのが、いつの間にか定着していきました。

道場は、毎週水曜日の午後6時から10時まで計算機センター内の一室で開かれました。稽古はとても厳しく、7時を過ぎなければビールは許



されません。修行の継続により、科研が終了する一年前には、私のお腹周りとともに検索システムの完成という成果が出ました。その後、各メンバーの状況が変わり、道場は一時解散となりました。ところが、しばらく修行を怠っていると、脳みそがゆるんでくのを実感したため、再開をお願いしました。専攻の院生・修了生を中心に新しい参加者を募り、現在は立教大学共生社会研究センターに場所を移し、稽古をつけていただいています。開催は隔週の金曜日、時間は午後7時から9時半と時短になりましたが、稽古中のビールがなくなったためか、集中力は増したように感じます。道場の修行では出たお腹は引っ込みませんが、脳みそまでゆるまぬ様、先生には引き続き厳しい稽古をつけていただきたいと望んでおります。

入澤先生のご退職に寄せて

久保山 哲二（アーカイブズ学専攻教授）

学習院大学にアーカイブズ学専攻が開設され、入澤先生が計算機センターとの兼務を始められた2008年度は、私が学習院大学の計算機センターに赴任した年でもあります。当時の私は新しい職場環境になれることに精一杯で、ちょうどそのような濫觴の年であったことを知ったのは、しばらく後になってからでした。

そして、数年前から金曜日の夜になると私の研究室の向かいにある計算機センターの会議室に入澤先生を中心に大勢の方々が集まり、コンピューターの画面をプロジェクタで投影しながら、ああでもないこうでもないとしそうに議論している姿を目にするようになりました。後に、この集まりがデジタルアーカイブについて実際のシステムを通して理解を深める「入澤道場」であることを知りました。コンピューターの専門性を持たない方々が、細かい挙動を含めたシステムの理解に取り組むことは、おそらく、私にとって日本近代史を理解してくずし字の文献を読み解かねばならないのと同じようにハードルの高い作業です。このような場が継続しているのは、入澤先生のリーダーシップと求心力の賜であろうと思います。これまでも、入澤先生は、国内インターネットの揺籃期から学習院の情報インフラと研究・教育のための情報システムの構築を主導し、ご専門の結晶成長の分野では1997年度から5年間、約5億円規模の巨大プロジェクトのリーダーとして大勢の研究者を率いるなど、様々な領域の人たちが垣根を越えて集まれるような場を育て、高いリーダーシップを示してこられました。

後任として私も2019年度からアーカイブズ学専攻でデジタルアーカイブズに関わる教育・研究に携わることになりました。このような方法論の確立していない新しい領域に、手探り状態で取り組むにあたっては、領域を越えた場が不可欠です。これまで、近くで入澤先生の取り組みを知ることができたのは幸運であったと思います。あらためて感謝申し上げます。

入澤寿美先生との2年間

下重 直樹（アーカイブズ学専攻准教授）

アーカイブズ学専攻の教員として入澤寿美先生と一緒にできたのは、ご退職される最後の2年間という短い時間でした。その間、専攻のこれまでの歩みや抱えてきた課題について、「菌に衣着せぬ」と評してもいいような、ストレートな表現でズバリとご教示いただき、時には厳しいお言葉で一層の奮起を促されたこともありました。ご専門の分野、理系ならではの合理的なものの考え方とともに、専攻や院生への温かい情愛、私たちの将来への強い期待とが同居した先生のご指導を賜ることができたことは、まことに幸いなことでありました。

と、堅苦しい口上を述べておりますと、またお叱りを受けるかもしれませんので、先生との思い出を紹介して、私が接したそのお人柄を記録しておきたいと思います。

専攻では入試用務の合間に大村庵から食事をとって、みんなで昼食を摂りながら雑談をすることが通例になっています。前日にお酒を(ほどほどに)召される先生方もいらっしゃるので、その多くが蕎麦屋にも関わらず消化の良いカレーうどんを注文するのが定番ですが、入澤先生の場合は特に麺を「きしめん」に変更されることがありました。カレーが良く絡むから、あるいは食感がお好みなのだろうか、と勝手な想像をめぐらしていたものですが、真似をして注文をしてみたところ、面接等で時間が押してしまって、多少麺が伸びたところで蕎麦やうどんほど不味くならない、という極めて合理的な理由から選択したのであろうという確信を持つことができました（ハズレていましたら申し訳ありません）。

入澤先生はまた、大学の事務組織や法人との折衝のご経験などを通じて、極めて実務的な感覚をお持ちでした。事務官から大学の世界に飛び込んだ私にとって、アカデミックな理屈よりも事務的な話の方が分かりやすいことが多く、先生の反応もみながら事案の善し悪しを考えることが多かったように記憶しています。教授会で出てきた案件、ことに施設・設備関連の図面や書類をひっくり返しながらこっそり談笑するのが、私にとっては長時間の会議を耐えしのぐ上でのささやかな楽しみになっていました。

さらに、長年顧問（部長教員）としてご尽力されてきた準硬式野球部についても、着任間もない頃から教授会の合間に幾度となくお話を聞く機会がありました。どう見ても運動ができそうにもない私にどうしてそのような話をするのだろうかと言いがっていましたが、気が付いたら先生の後任者となっておりました。

ご研究とは全く関係のない挿話ばかり書いてしまいましたが、冷静かつ中長期的な視野をもって物事を着実に進めていくという先生のお仕事を肌で感じる事ができたように思います。

このほか、専攻には著名な「入澤道場」に始まり、「入澤方程式」に至るまで先生のお名前を冠した言葉が数多く残っています。これらを紹介するのは、紙幅も尽きましたのでまた別の機会といたしましょう。

まもなく、春を迎えて専攻は希望に満ちた新しい院生を迎えることになります。「カレー

きしめん」を召し上がる先生のお姿を思い出しながら、この学びの場を将来へとつなぎたいと念じています。

入澤先生のご退職によせて

武内 房司（アーカイブズ学専攻教授）

昔、ウィンドウズユーザーだった頃、ベトナム語の入力システムを導入しようとしてその方法がわからず、途方に暮れたことがある。そんな時、計算機センターに支援組織があるのを思い出し、同センターに連絡を入れると、スタッフの方がやってこられ、すぐさまセッティングしてくれた。存在は知ってはいたが、なるほど、支援組織というのは IT 弱者にとって実にありがたい存在だと認識したのはこの時であった。今ではベトナム語の入力システムなど、標準で装備され誰でも簡単に使用できるものになっているが、パソコンが普及しはじめたころは、初心者にとっては何ごとともハードルが高かったのである。

その後、2008年より、アーカイブズ学専攻のスタッフとしてご一緒させていただくようになってから、こうした支援組織の立ち上げに入澤先生が大いに尽力されたことを知った。マシンや情報科学にうとい私たちが受けた恩恵は計り知れない。専門家がさまざまなツールを使いこなすというのはある意味で当然である。しかし、専門外の者でもそれらの恩恵を享受できるような配慮、さらにそれを可能とするシステムの構築もまた必要であり、これはネットワークやITの問題にとどまらない。すべての学問分野においてもいえることだろう。先生とは、アーカイブズ学専攻創設から10年間同僚としておつき合いさせていただく機会を得、韓国や台湾、ベトナムへの研修旅行にもご一緒させていただいた。夕食後のひととき、きまって先生の部屋に私どもが集まり、酒を酌み交わしながら訪れた国の印象・アーカイブズその他もろもろのよもやま話に花を咲かせるのが慣例であった。そこでの洒落な会話のなかに、文理を越えたアーカイブズ学の広がりを感じたものである。入澤先生にはこれからも、そうしたアーカイブズ学の可能性について、私どもを引き続き啓発してくださることを願うしだいである。



入澤寿美先生を送る

千葉 功（アーカイブズ学専攻教授）

入澤寿美先生とは、アーカイブズ学専攻としては1年間御一緒させていただきました。しかし、アーカイブズ学研修旅行における、かの有名な「夜の入澤道場」は経験できずじまいでした。2018年度の研修旅行は当初7月に予定されていましたが、西日本豪雨のため急きょ延期、11月にあらためて行われた研修旅行には校務のため参加できなかったからです。「夜の入澤道場」で入澤先生の御話をうかがえなかったこと、痛恨のきわみです。

よって、アーカイブズ学専攻で御一緒する以前のことを含めて、入澤先生ということで思い出されることを書きたいと思います。

入澤先生の御話で強く印象に残っていることは、自分や自分の所属学科のことだけではなく、広く大学全体の視点から見なくてはいけないということです。入澤先生御自身が計算機センターの責任者として、学内のコンピューター環境を文字通りゼロから構築されたことと関係すると思われます。また、大学全体のマネジメントを常に考えていらっしゃる高埜利彦先生と行動をともにされる機会が多かったこともあるでしょう。私のような近視眼の人間としましては、入澤先生の御言葉は自戒の言葉としてここにあります。

もう一つはアーカイブズ学専攻の将来に関してです。入澤先生は御辞めになる前の1年間、もっと海外研修の機会を多くしないといけないとよくおっしゃっていました。海外研修のためにはかなりの資金が必要ですが、近年の厳しい財政状況では助成金を獲得するのみなかなか困難です。もちろん、アーカイブズ学専攻にとって海外研修が大きな効果を持つことは確かです。アーカイブズ学専攻を先輩の先生方から託された私たちにとって、大きな宿題が出されたわけですし、これからその宿題に答えていきたいと、決意を新たにしているところです。

入澤先生への手紙

保坂 裕興（アーカイブズ学専攻教授）

1990年頃、「助手から専任教員になった先生がおられる」という話を高埜先生から聞いていた。いつかお目にかかってみたいと思っていたが、専攻開設で同職させていただくこととなった。以下では二つのことに触れ、お礼の言葉に代えさせていただきたい。

先生は何事につけ仕事が早いのだが、研修旅行を十数回共にした



経験からは、それだけではない。旅行の夜は「入澤ゼミ」が開かれた。多くの院生と対面し、研究生活の様々な課題を聴き出し、いっしょに考え、何かの答えを掴ませる。そういう<無類の教育者>として専攻の充実に貢献してくださった。

日本のアーカイブズの脆弱性は、その特定及び構造的把握の弱さ、それ故のアクセス情報の不確かさにある。先生が専ら注力した資料記述ソフトAtoMは、その構成や使い方から、逆に構造的把握が不可欠であることを教える效能をも持った。日本のアーカイブズ学の財産である。誠に有り難うございました。

入澤先生がいらした意味

森本 祥子 (2009-2011年度 助教)

アーカイブズに興味を持つ人はたいていが歴史学出身、というのが定番だった。だから古文書もホコリも大丈夫だけれどもコンピューターはね…と後ずさりしがちなのがアーキビストの習性だった。

そんななか、アーカイブズ学専攻が立ち上がったとき、入澤先生が教員としてとても深くコミットしてくださったことは、学習院大学だけではなく日本のアーカイブズ学の進展にとって、本当に大きなことだった。アーカイブズを学ぶ過程で、初めて本格的にコンピューターの世界に当たり前に、しかも本格的に、触れるようになったからだ。この効果は受講した学生個人のスキルアップというにとどまらない。

ちょうど筆者が助教として在籍していたとき、学生のひとりがICAのAtoMを修論の素材に取り上げた。その学生はなかなかパワフルに、日本語化のために同級生達をまきこみ、さらには入澤先生の指導を得て、無事に修論を書き上げた。筆者は日本でのAtoM受容について詳細に把握しているわけではないが、このときに入澤先生が指導くださったことが、第一歩だったのではないかと思う。入澤先生は、僕も初めてで勉強しながらだよと、いつもの飄々とした口調でおっしゃっていたけれども、アーカイブズ学専攻が立ち上がってまだ2～3年、本来の御専門と全く違う分野へのコミット、さらにはアーカイブズ学の世界でも新しい取組みがテーマ、などという学生指導はどうにも無茶な話だ。きっと先生は相当に時間もエネルギーも割かれたことと思う。もし入澤先生が正面から向き合ってくださなかったら、日本は今もAtoMが遠いものだったかもしれない。修論を書いた学生だけでなく、日本のアーカイブズ界全体が、大きな恩を蒙っている。



学習院大学を定年退職されて、もうアーカイブズから離れてもおかしくはないのに、日本アーカイブズ学会の研究会に顔を出してくださった。アーカイブズのことを引き続き心にかけて下さることが、本当に嬉しかった。日本でアーカイブズとコンピューターの世界を本格的につないでくださっている先生には、まだまだご指導いただかなければならないと思っているのは筆者だけではないだろう。結晶の世界に戻りたいとお考えかもしれないけれど、今しばらく、こちらの世界にも片足を残しておいていただきたいと切に願っている。

入澤寿美先生と直感

湯上 良（アーカイブズ学専攻助教）

「オレ、いくつに見える?」。おもむろに入澤寿美先生がそうお尋ねになられたのは、2018年3月に専攻主催で行われた高埜先生と清原前助教の送別会二次会の席でした。颯爽としたお姿、スラッと伸びたお見脚、黒々としたお御髪。正直に申せば、50代後半だろうか、とも思いました。しかし、さすがにそれはないか、と思い直し、「60代前半ぐらいでしょうか?」と多少の逆サバでお答えしました。「ほら!これだよ!!」。逆サバとは言え、若々しさを保たれていることを喜ばれるかと思っていたのとは全く正反対の反応。入澤先生は若く見られたことに憤られ、着任直前のわたしは、「えらいところに来ることになってしまった…」と思ったものでした（その後、専攻の今後についても熱く語られ、若いわれわれを叱咤くださいました）。

専攻会議の場などでは、ここぞというところで長年のご経験と蓄積がこめられたご意見を発せられます。歴代の専攻の方々もとても助けられたのではないかと思います。また、ご意見を述べた後の目配せは、少しいたずらっぽくもあり、スポーツのアイコンタクトのようです。後に伺ったところでは、先生もアイコンタクトとして考えておられ、それが通じた際に喜びを感じられていたとのこと。また、金比羅山の奥社まで飄々と登られていたお姿も忘れられません。

ご退職後すぐに行われたある学会後にお目にかかった際、入澤先生は、いつものように「ちょっとちょっと」と笑顔で手招きをされ、先生の周りを取り囲む方々に恐縮しつつ、お側へと伺いました。本専攻の助教は、2年目から授業を担当させてもらえるのですが、「君はいい授業するよ。見りゃわかる」という思いがけないお言葉を賜りました。他校で歴史の授業を臨時で担当したことはあるも



のの、アーカイブズ学に関わる形での授業は初めての経験です。不安を抱えつつ、4月を迎えていた身には、緊張を解していただいた魔法の一言でした。すでに授業は20回を越えますが、先生がおっしゃられた通りに学生たちとともに歩めているのか、不安と自問を繰り返す毎日です。日々の研鑽を積みながら、入澤先生の境地に少しでも近づけるよう、これからも心して参りたく存じます。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

入澤先生のご退職に寄せて

後藤 佐恵子（2011-2013年度 副手）

入澤先生ときちんとお話したのは、2011年4月の入学式のことだったと記憶しております。

入学式のあと、アーカイブズ学専攻では新入生と教員で懇親会が行われます。その日も馴染みのお店で、先生方、新入生の皆さんと和気藹々と懇親会が開かれました。お酒も進み、だいぶご機嫌になられた入澤先生は、ラム酒をビール瓶の王冠（蓋）に注ぎ、おもむろにライターで点火されたのです。シュボツという音とともに青く小さな火柱が上がりました（注：火災の危険性はありません）。「おお、ついたついた。あちちっ。」私はあの時の先生のいたずらっぽい笑顔を忘れることができません。その後、H坂先生ご先導のもと、店内で学習院院歌を皆で歌ったことも含め、研究室に着任したばかりの私は、「えらいところに来てしまった…」と思ったものでした。

と、いきなりこんなエピソードを記してしまいましたが、学内の情報環境の整備や管理を一手に担っていらした偉大なる先生、普段は飄々としながら、会議などでは、事務方の意見を汲み取ってくださり、助けていただくことも多々ありました。おかげさまで、専攻での3年間を無事に過ごすことができたと思っております。本当にありがとうございました。

また、先生と過ごしてきた副手生活の中で唯一心残りなのが、私はあまりお酒が飲めないため、研修旅行などで夜な夜な催される“入澤ゼミ”にあまり参加できなかったことです。ご退職された今、お酒はほどほどに、とお伝えしたいところではありますが、機会がありましたら、ぜひお仲間に加えていただきたく存じます。

入澤先生、これまで大変お世話になり、ありがとうございました。これからもご健康に留意され、益々のご活躍を祈念いたしております。

入澤先生のご退職に寄せて

高橋 奈月（2014-2016年度 副手）

私が初めて入澤先生にお会いしたのは、大学1年生の時に必修だった初等情報処理の授業でした。最初はインターネットやメールの使い方だ楽勝！と思われたのに、最終的に各自ホームページをゼロから作る課題を必死でこなすことになる、あの思い出深い授業です。

その時の先生が、大学のパソコンシステムの中心である計算機センターの所長で、後に職場でお世話になるとは、当時は夢にも思っていませんでした。

私は最初のころ、入澤先生はとてもクールな先生だと思っていました。結晶学を専門とされて、情報処理のスペシャリストで、時折コップの外側の水滴をじっとご覧になっていたりで、日常を科学の視点で見ているのだからと思うこともしばしばありました。でも、今では先生に熱い炎のイメージを持っています。学問に対して、そして人間に対して、ずっと希望を絶やさず熱く関わっていらっしゃるのを見てきたからです。

例えば、初等情報処理の授業もその一つだったのだと思います。文系も理系も関係なく、先生は新生全員に平等にパソコンの基礎を学ぶ機会を与えてくださいました。限られた時間の中、ソフトの便利な使い方からホームページの作成まで鍛えてくれる授業は他に経験がありません。

振り返れば、仕事でよく使っているワードやエクセルの関数も、全て先生から教わったものでした。アーカイブズ学専攻の副手になり、専攻ホームページの更新を自力で行うのだと聞いた時には冷や汗が出ました。その時まですっかり、習ったことも忘れていたのです。ところが引継ぎを受けると、何故か基本がすんなりと理解できることに気がきます。そこから授業の記憶が次々と蘇ってきたのです。

先生の辞書に、「無駄」という言葉はないのかも知れない、と思うことがあります。学生に対しても、事務に対しても、教えても無駄、考えても無駄、と見放す瞬間を、私は一度も見たことがないのです。どうしたら伝わるか、どうしたらもっと面白くできるか、先生はずっとご自分のことと同じように親身に考え続けてくださいました。そして実際、無駄なことも、諦めるに値することも、ひとつもなかったのだと実証してくださいました。

学生としても、副手としても、先生から沢山のことを学ばせていただきました。本当にありがとうございました。

入澤先生のご退職に寄せて

西山 聖奈（2017年度 副手）

「これおいしいねえ、うまい！」——初めての専攻会議中、緊張でガチガチになっていた私に、お茶菓子を頬張りながら笑顔で声をかけてくださったのが入澤先生でした。突然のことに、思わずふっと笑ってしまい、緊張が和らいだのを今でも覚えています。

腰の位置が高くスタイル抜群、はにかんだ笑顔がステキな入澤先生は、いつも飄々としていて、なんだかそよ風のような先生だと思っていました。専攻の誰とも気さくにお話をしてくださり、小さな変化にもよく気がついてそっと寄り添ってくださる。緊張でいっぱいだった私の心にそっと風穴をあけて風通しをよくしてくださったのは、まさに入澤先生の「そよ風社交術」であったと思います。その後の専攻会議は、入澤先生のおかげでいつもリラックスしてのぞむことができました。そして、お茶菓子をおいしそうに食べてくださる姿を見るのが専攻会議中の私の密かな楽しみになりました。

アーカイブズ学専攻を語る上で欠かせないのがお酒にまつわるエピソードですが、入澤先生もまた「入澤道場」という社交ならぬ酒交の場をお持ちになるほど、お酒に関してはたくさんのエピソードをお持ちの先生でした。残念ながら私は道場への参加はかなわなかったのですが、今回の『GCAS Report』でみなさまの道場でのエピソードを拝読するのを楽しみにしています。お互いアーカイブズ学専攻は離れてしまいましたが、もしまた道場を開催するご予定がありましたら、そのときはぜひお声がけくださいませ。お酒に合うお菓子を探しておきます。

1年間という短い期間ではありましたが、在職中は大変お世話になりました。どんな複雑な問題もビシッと区画整理してくださる入澤先生に、事務室も専攻もいつも助けられていました。本当にありがとうございました。

末筆ではございますが、入澤先生の今後益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

入澤先生と四大戦

本岡 彩（アーカイブズ学専攻副手）

入澤先生に初めてお目にかかったのは、2014年の四大戦のときでした。四大戦とは学習院・成蹊・成城・武蔵の4校で行われる競技大会です。学生の正式種目や一般種目だけでなく、教職員種目もあります。入澤先生は、午前に行われた教職員種目のソフトボールにしっかりと出場されたあと、午後のバレーボールには応援にいらしてくださいました。先生はバレーボールにも出場されるつもりのご様子でしたが、スポーツ・健康科学センターの廣紀江先生に「怪我すると大変だから・・・」と止められてしまいました。入澤先生と一緒にバレーボールが出来なかったことは残念に思っています。

試合中、応援というよりむしろ監督のような入澤先生に「なんでセッターやらないの？」とお声をかけていただきました。どうやら、バレーボール経験者の動きをしている私がセッターをやっていないことを、先生は不思議に思われたようです。私は「セッターは苦手なんです。」と答え、この年はセッターをやらずに四大戦を終えました。結果は優勝に一步及ばず、準優勝でした。入澤先生が試合に出られなかったのが敗因のひとつかもしれません。

その5年後、私はアーカイブズ学専攻の副手となり、入澤先生にお世話になることとなりました。ある飲み会で入澤先生は口角泡を飛ばし、もとい、枝豆を飛ばしながら、こうおっしゃいました。「だから、お前は頑固なんだよ。俺がセッターやれて言ってんのに、やらないの。こいつは頑固だなあって思ったよ。」



試合の時に入澤先生、いや、入澤監督の言うことをおとなしく聞いておけばよかったと若干反省しつつ、何よりも、5年も前のことを覚えてくださっていたことがとても嬉しかったです。素直さは失わず、時には頑固に意思を持って残りの任期を全うしたいと思います。入澤先生、大変お世話になりました。今後ともよろしくお願いいたします。